

最近、ニュースなどでDIY (do it yourself) & IoT (internet of things) などの略語をよく見かけます。これらの略語をきちんと理解できている人は、どれだけいるのでしょうか。今挙げたような略語は、知らなくてもすぐに生活の問題にはならないでしょう。しかし、もし医療の世界で、相手に理解してもらえないような言葉の使用や説明が続くと、医療者と患者・家族との間のコミュニケーションがうまくいかなくなったり、ひいては医療不信、訴訟につながったりする可能性があります。

多用される専門用語

西村 元一
金沢赤十字病院副院長

ドクター元ちゃん
がんになる



手術後に栄養剤を手にする筆者＝本人提供

医療者と患者・家族間の高い壁

記載してあるような専門用語は、「知っている当然」という感じで説明に使われています。

そうは言っても、本当に患者の皆さんは、言葉の意味を理解できているのでしょうか。先日、

ある市民向けの講演会で、こんな話をしました。「昔は『お任せします』ですべてが進みましたが、今はきちんと説明を受け、患者の側もそれに同意をする必要があります。医者から説明を受けた時、同意のサインの前に分からないことがあったら、どんな簡単なことでも必ず質問してください。何も質問しないと、全部理解できたと判断されてしまいますよ」

すると、会場の参加者から「妻の病気の説明を受けたとき、医師の話は専門的な言葉ばかりでよく分かりませんでした。医師は忙しそうだし、そんなところで質問をするなんて絶対無理です。言われるままにやるしかありません。医療と自分たちには高い壁があります」と、半ばあきらめたように言われました。実は、医師も使いたくて難しい言葉を並べているわけではありません。もっと簡単に、もっとゆっくりと説明をしたいのですが、昔よりも短い時間に細かくて皆さんの情報、それもあいまいではなく確実なものを伝える必要があるのです。

私も患者となって、検査や治療ごとに皆さんの書類が提示され、目を通しました。医師の立場から見ればがんの病期(ステージ)などは分かりやすくかみ砕いて記載されるようになっていきます。一方、患者の立場で考えてみると、例えば解剖などの基本的な知識がないところに「リンパ節」と書かれても、「本当に皆がどこまで分かっているんだろうか」「しかし、これを簡単に理解してもらおうのは難しく、どうすればいいんだろうか」と自問自答しつつサインをしました。

にしむら・げんいち 1958年金沢市生まれ。83年金沢大医学部卒。金沢大病院などを経て、2008年金沢赤十字病院第一外科部長、09年から現職を兼務。13年から、がん患者や医療者が集うグループ「がんとむきあう会」代表。

次回10月2日掲載